

## 〔書 評〕

松本礼二 著

### 『知識人の時代と丸山眞男：比較20世紀 思想史の試み』

(岩波書店, 2019年 5 月23日)

土 倉 莞 爾

#### 目 次

1. はじめに
2. 本書の概要
3. 知識人の20世紀思想史
4. 日本の知識人について
5. 21世紀の自由と個人主義
6. 丸山眞男論
7. おわりに

#### 1. はじめに

本稿は、松本礼二著『知識人の時代と丸山眞男：比較20世紀思想史の試み』の書評を試みるものであるが、まずは、2. でその著書の概要を素描する。倉卒の中での叙述で、事実上、著者の文章の「抜き書き」のようになっており、適正な概要になっているのか、評者自身が熟成された文章にすべきではなかったか、いずれも達成されず、残念な結果になったことは遺憾である。3. ～6. までは評者の著者に届けたいコメントを、「知識人の20世紀思想史」、「日本の知識人について」、「21世紀の個人と自由主義」、「丸山眞男論」と題して、未整理のまま、乱雑に記したものである。

思えば、「丸山眞男論」については、類書が多数存在するが、本書のような、「知識人」、「比較20世紀思想史」、「丸山眞男」を組み合わせた「丸山眞男論」は希少なのであり、著者の壮大な構想が読み取れ、見事な達成だと思われる。それにしては、非力な評者の『書評』は、あまりにも貧相な「コメント」(?)になってしまったことを冒頭に

お詫びしておきたい。

## 2. 本書の概要

書評の対象である本書の目次は、次のようになっている。目次にそって、本書の内容を略述しておきたい。

### プロローグ 知識人の歴史としての20世紀思想史

著者松本は、ここで、「大衆の噴出」を1つの特徴とする20世紀は、またドレフュス事件から「東欧革命」まで知識人の栄光と挫折の時代であり、知識人の歴史としての20世紀思想史を書くべき時が来ているのではないか(viii頁)と言う。

そして、ルカーチやサルトルへの論駁ではなく、その思想史的検討が欧米でようやく盛んだとすれば、林達夫から丸山眞男まで、日本の知識人の思想を歴史的に対象化することは、彼らの知的遺産を糧にものを考え始めた世代の歴史家の義務であろう(ix頁)、と著者は述べる。

### 第I部 知識人の時代と日本

#### 第1章 知識人の時代と日本

本章は、(1) 近年フランスにおける研究成果に照らして、20世紀フランスの知識人像を簡潔に描き、(2) それに対応する日本の知識人像を特定し、(3) 両者の比較から浮かび上がる日本の知識人の特質を指摘しようとするものである(7頁)。

社会集団としての知識人が誕生し、政治と文化に重要な役割を果たす事象は、社会の平等化、民主化の進展途上のある段階に結びついている。エリートへの道が開かれ、その分化が前提になるという意味では、ある程度の平等化を条件とするが、知識人は対抗エリートではあっても、エリートには違いない。知識人、とくに左翼知識人は人間の平等を唱え、労働者の開放運動にコミットするが、政治的にも、知的、文化的にも、大衆化が本格的に進むと、知識人の存在基盤それ自体に影響する。大筋でこういう見方が、フランスにおける近年の知識人研究に共有されている(12頁)。

日本の近代の教育制度は、2018年に亡くなった知日派のイギリス人社会学者ロナルド・ドーア Ronald Dore なども言うように(ドーア, 1978)、近代化の後発国の共通の課題、先進国の技術の組織的移転を効率的に行うためのシステムであり、その最初にしておそらくもっとも成功した例である。したがって、ヨーロッパの最新の学問を実用目的

松本礼二 著『知識人の時代と丸山眞男：比較20世紀思想史の試み』（岩波書店、2019年5月23日）

にしたがって輸入することが基本になる（23頁）。

日本の知識人の教養の中身が、本格的に西洋化し、当面する政治や社会の諸問題も、第1次世界大戦以後、欧米との共通性があらわになるにつれて、同時代の欧米の学問、思想の摂取と紹介は、ますます迅速で精緻になるが、そうであればあるほど、知識人の社会における外国人の余地が狭まるという逆説的な事態も進行する（28頁）。

知識人の移入も移出も稀であったのと裏腹に、近代日本の「知識の制度」（京極純一）の頂点に組み込まれて来たのが「洋行」や「留学」である。むしろ「洋行」や「留学」も時代とともに意味が大きく変わっている（31頁）。

この点で逆説的なのは、戦前に自己の学問の基礎を築いた最後の世代である「戦後啓蒙」の世代は、戦争のために本来留学すべき時期にその機会を奪われた世代だという事実である。……（中略）……それ以上に逆説的なのは、それにもかかわらず、この世代の知識人こそ、近代ヨーロッパの思想と学問を深く理解し、これを方法的に鍛え上げ、日本社会の学問的分析に独創的な形で生かしたという事実である（32頁）。

そこで問題は、明治以後の日本の知識人のうちに特権的集団への帰属意識と区別された普遍的知性への共属の意識が育たなかったのはなぜか、……（中略）……ということになろう。それを問うことは、近代日本の国民社会全体の質を問うことに他ならない（39-40頁）。

## 第2章 知識人と政治——アメリカの場合

「政治参加する」知識人のイメージは、ドレフュス事件のゾラから第2次大戦後のサルトルまで、フランスの知識人に典型的に付着するイメージだが、類似の現象はヨーロッパの他の諸国にもアメリカや日本でもある時期広く見られた。……（中略）……アメリカの知識人の政治とのかかわりも、20世紀の政治の共通の文脈を有するが、他方で歴史的に形成されたアメリカ固有のカルチュアがアメリカの知識人の立場に独特の制約を加えて来た面も無視できない（46頁）。

職業政治家は概して知的人間とは別の類型に属し、知識層は政治文化の中で孤立しているという建国当時とは対照的なイメージが成り立ったのは、19世紀の政治発展がアメリカ固有のカルチュアの形成に決定的な意味を持ったからである。20世紀における知識人の政治への関与はある意味で19世紀に形成された「反知性主義」のカルチュアに抗し、かつその不断の制約の下になされたと言ってもよい（48-9頁）。

19世紀を通じて進行した知的エリートと政治との距離の傾向を逆転させ、新しい世代

の知識層を政治的・社会的改革運動に立ち上がらせたのが、革新主義の運動であった(51頁)。

大学教育の充実を背景に世紀転換期のアメリカは、社会学、政治学、心理学等種々の分野でヨーロッパ追随を脱したアメリカ独自の学問を確立しつつあった。……(中略)……これらアメリカ独自の社会緒科学は実用的・応用科学的性格が一様に強かった。そして、まさにこの時期に完成された真にアメリカ的な哲学、プラグマティズムは個別科学を超えて、アメリカの学問一般の実用主義的性格を基礎づけた(53頁)。

革新主義の運動は、アメリカの知識層の理想主義と政治的関心を覚醒し、そこに見られた知識階級のさまざまな形の政治への関与は、狭義の革新主義時代を超え、ニューディール期やケネディ政権の時代にも繰り返されるパターンの原型をなしている(55頁)。

1920年代、30年代に設立されたフーバー研究所やブルッキングズ研究所、戦後は代表的なランド・コーポレーションをはじめ多くのシンクタンクがワシントンや地方の研究都市に拠点を置いて、政府や政党の政策需要に応え、人材を提供している(58頁)。

マッカーシズムの病理現象は今日から見れば一時的現象のように見えるかもしれない。たしかにこれをもってアメリカ社会全体が全体主義やファシズムに汚染されたと見るのは大げさに過ぎよう。ただ、それが一部のデマゴグの扇動によるだけでなく、広範な世論の支持を得たという点も忘れてはならない。その背景には……(中略)……アメリカの大衆に根強い東部エスタブリッシュメントを構成する知識階級への反感があり、また……(中略)……いわゆる「他人指向」型人間類型に特徴的なコンフォーミズムが働いていた(64頁)。

かつて冷戦のイデオロギー対立が激しかった頃、港湾労働者出身の特異な思想家エリック・ホッファーは「20世紀の根本的な対立は資本主義と社会主義の対立ではない、知識人とアメリカの対立である」と述べたことがある(ホッファー、1985)。アメリカ社会における知識人の現況は20世紀の終わりの徴候なのか、アメリカ社会の変質を告げているのだろうか(70頁)。

### 第3章 リベラル・デモクラシーの歴史的形成——20世紀政治思想の見取り図——

本章は世界大の規模で自由民主主義の将来を占おうとするものではない。冷戦終結後今日に至る歴史状況を前提にしつつ、その過去を振り返り、現代の問題への示唆を引き出すことを課題としている(74頁)。

19世紀前半の自由主義の制度構想の核心は、私的自由と公的自由との分断を前提に、

松本礼二 著『知識人の時代と丸山眞男：比較20世紀思想史の試み』（岩波書店、2019年5月23日）

政治生活を限られた「能動的市民」の世界に閉じ込めるところにあった。代表制は不可欠であり、その基盤は狭隘であった。財産、教養、能力が政治的権利行使の条件とされ、そうした条件を備えた「法定国民」の中でのみ討論の政治が可能とみなされた（75頁）。

19世紀後半のヨーロッパの自由主義は、1848年の革命の昂揚が「ルイ・ボナパルトのブリュメール18日」に反転し、「人民投票独裁」の正統化に終わった歴史過程への反省を原点に、選挙権を漸次拡大し、議会制の基盤を「ブルジョワ寡頭制」から国民社会に広げる方向を目指した。……（中略）……他方、社会主義や労働運動の側から見れば、このプロセスは一口で言って、元来、体制の外、正規の政治過程外に生じたこれらの運動が議会制民主主義と福祉国家の初期形態の中に包摂され、世紀前半の急進性や革命性を喪失するプロセスと言えるであろう（77頁）。

民族自決と国際協調を掲げるウイルソン主義が唱えられた第1次世界大戦後も、植民地主義の遺産は西欧自由民主主義諸国にとって長くそのアキレス腱であり続けた。逆に言えば、民族自決原則においてウイルソン主義に呼応しつつ、これを植民地の自己解放運動と結びつけたレーニン主義の強みはその点を衝いたところにあった。……（中略）……レーニンの『帝国主義論』が社会主義革命の課題を民族解放闘争に結びつけたことはこの点で決定的であり、ファシズム勢力が駆逐された第2次大戦後も社会主義が自由民主主義への選択肢として残り得た最大の理由は、途上国における近代化戦略として有効とみなされた点にあった。アメリカの歴史学者イマニュエル・ウォーラーステイン Immanuel Wallerstein がウイルソン主義とレーニン主義との相互補完性を強調する（ウォーラーステイン、1997）所以である（79-80頁）。

ヨーロッパの自由主義が深刻な危機に直面した状況の中で、これに新たな生命力を吹き込んだのはアメリカの自由主義であった。……（中略）……ジョン・デューイ John Dewey からジョン・ロールズ John Rawls まで、20世紀アメリカの社会改革に理念を提供した自由主義的知識人が、大衆の政治的活性化とエリートの合理的政治指導とを結びつけようとする姿勢は、悲観主義に傾きがちなヨーロッパの自由主義者の態度と顕著な対照を示している（81-2頁）。

ソ連国内に粛清の嵐が吹き荒れ、「牢獄兵営国家」化が頂点を極めたその時期に、西欧諸国でソ連に対する肯定的見方が広がり、共産主義への同調ないし同伴が最高潮に達したことは大きな逆説だが、自由主義諸国の宥和政策が続く限り、ナチズムやファシズムの攻勢に対する抵抗運動はソ連の支援に頼らざるを得なかったのも一面の真実である……（中略）……マルクス・レーニン主義が自由民主主義に対する20世紀最大の対抗原

理をなしたのは紛れもないが、両者が啓蒙の子として共通の起源を有し、その点でナチズムの「能動的ニヒリズム」から区別されることは、「現存社会主義」の評価とは別に考慮しなければならない（83頁）。

第2次世界大戦後の冷戦は「2つの民主主義」の対立というイデオロギーの次元だけで説明できるわけではないが、政治、経済、軍事から科学技術や文化にまで及んだ体制間競争において自由民主主義が社会主義に勝利したことは紛れもない（84頁）。

混合経済と福祉国家が貧困と失業の問題に一応の解決を付けたことと並んで、植民地支配の清算なくしては自由民主主義の勝利はありえなかったであろう（85頁）。

ケインズ政策による混合経済化と植民地主義の清算は、簡単に言えば、ロシア革命以来の社会主義の挑戦に対して資本主義が一応の答を出したことを意味する。……（中略）……しかしながら、資本主義の社会主義に対する相対的優位が明らかになった70年代以降、西側の自由民主主義体制もまた転機を迎え、内部矛盾を露呈することになる。その転回点が71-73年の時期にあったこと、すなわち、ニクソンショックとオイルショックによって、国際通貨の安定と低エネルギー価格という戦後経済成長の基本条件が失われたことが決定的だったことは言うまでもない。……（中略）……戦後西側の自由民主主義の政治体制は、20年代、30年代に顕在化した大衆民主主義の病理現象を回避し、多元化した社会における民主政治の実践を政党政治と議会制の制度的枠組みに回収することに相当の成功を収めた反面、政治の課題を利益配分の合理化に局限することで得られた社会の安定と経済的繁栄は、官僚制の肥大と政治エリートの保守主義、これに対応する大衆の受動性を顕在化させずにはおかなかった（88-9頁）。

20世紀最後の3分の1における、情報・伝達・交通技術の飛躍的進歩は、資本と労働と通貨の国境を超える移動を一挙に加速し、市場の世界化をあらゆる面で促進した。……（中略）……コンピューター技術が可能にした巨大な金融と為替の国際市場は、実体経済をはるかに上回る巨額なカネの動きを生み出し、「カジノ資本主義」と評されるような投機性を強め、一国の経済を短時日のうちに危機に瀕せしめるような通貨危機をさえ招いている。さらに、無制約な市場経済の世界化は当然外部不経済をも世界化し、環境問題を深刻化させつつある（93-4頁）。

経済の世界化はその根本前提を掘り崩しつつある。自由民主主義の政治体制もまた従来主権国家の枠組を前提にして制度化されて来たことは疑いない。国家を超えて、市場経済の世界化の趨勢に有効に対処しうる政治経済システムを自由民主主義は生み出しうるであろうか（94頁）。

松本礼二 著『知識人の時代と丸山眞男：比較20世紀思想史の試み』（岩波書店、2019年5月23日）

#### 第4章 戦後市民社会論再考

戦後日本の市民社会論は、資本主義経済の倫理的基礎を問い、(将来の)社会主義社会にとっての市民社会の意義を提起したこと、そして何より、軍事体制ないし権威主義体制の解体、民主政治の構築を喫緊の課題とする中で市民社会の問題を提起した点で、とくに東欧の市民社会論とかなりの程度共通の文脈で論ずることが出来る(100頁)。

丸山眞男は、羽仁五郎や唯物論研究会の例をあげて、戦時の言論統制の下、マルクス主義者やその影響を受けた学者、知識人の1部がマルクス主義の思想的源流を遡り、啓蒙の合理主義やブルジョワ・イデオロギーの積極面を押し出すことで時局への抵抗を試みた事実に注意を喚起している(104頁)。

松下圭一はすでにその学問的出発点をなす近代ヨーロッパ政治思想研究の中で、ロックにおいて頂点なす近代政治思想を「市民政治理論」と規定していた。……(中略)……いわゆる大衆社会論争の引きがねとして著名な彼の論文「大衆国家の成立とその問題性」(1956年)は、思想史解釈から現代政治理論への移行という点でも、『市民政治理論の形成』(松下、1959)と60年代以後の松下政治理論の展開とを結ぶ結節点を成している(108頁)。

「戦後20年を経た今日、マス状況の拡大の中から「市民」的人間型が日本で生まれつつある。…下からのムラ状況の根底的変革でなく、上からのマス状況の拡大が、市民的人間型の醸成を準備したのである」(松下、1994)。冒頭にこう宣言する1966年の論文「『市民』的人間型の現代的可能性」は、安保闘争から60年代前半にかけての日本政治の変容に実践的にも理論的にも関わった経験に基づく松下のこの問題への解答であった。……(中略)……要するに、松下は現代の大衆民主主義国家が発達させたさまざまな政治回路を通じての大衆の日常的な政治参加に市民的エートスの現代的再生を期待するのである(111頁)。

#### 第5章 日本における個人と個人主義——福沢論吉から山崎正和まで、トクヴィルを手掛かりに はじめに

欧米の個人主義と日本の集団主義の対比というステレオタイプは、肯定・否定どちらの立場からでも、日本人論におなじみのテーマである…(中略)…自分1個の私的領域への不干渉を願うにとどまらず、すべての個人の自由を普遍的に肯定し、個人の権利と自由の尊重が社会の益になるという哲学は、やはりルネサンス以後、近代ヨーロッパの歴史の中で定式化されたといえよう(119頁)。

トクヴィルは「哲学としての個人主義」にも「現象としての個人主義」にも否定的、少なくとも警戒的であるが、個人の自由と権利を尊重し、社会と国家の強制からこれを擁護する姿勢において、彼自身もまたある種の「個人主義者」といえる点も多くの研究者の指摘するところである（122頁）。

丸山は価値中立的な individuation（個人析出）という聞きなれない語を採用し、「個人析出」は近代化の1局面として普遍的に見られるとしても、それが生み出す態度や心性は一様でないとして、「遠心的 centrifugal」—「求心的 centripetal」,「結社形成的 associative」—「非結社形成的 dissociative」の2つの軸の交差の上に、「自立化 individualization」,「民主化 democratization」,「原子化 atomization」,「私化 atomization」の4類型を区別する。そして、英米においては「自立化」「民主化」が優勢（…（中略）…）であったのに対して、日本では「私化」あるいは「原子化」の傾向が主調であり、とくに関東大震災以後、「原子化」が進行したことが左右の大衆運動への動員を容易にしたという（123-4頁）。

### 1 明治期における個人と国民—福沢諭吉の「独立自尊」

以上、福沢の「独立自尊」の観念とトクヴィルの「個人主義」批判との関連あるいは類似を指摘したが、これは福沢が直接トクヴィルから学んだり、影響を受けたという意味ではない。トクヴィルを知る前から、福沢の思考様式にはトクヴィルのそれに通ずる面があったことに注意を喚起しただけである（128頁）。

### 2 大正期における個人主義の擁護—夏目漱石「私の個人主義」、大杉栄『社会的個人主義』、田中王道『徹底個人主義』—（省略）

### 3 戦後啓蒙と主体性

関東大震災以後、敗戦に至る時期は、およそ「個人主義」を積極的に主張し得なかった時代である。（…（中略）…）それだけに敗戦が明らかにした近代日本の国家プロジェクトの破産は、日本国民1人1人の責任、福沢のいわゆる「1身独立」が十分に確立しなかったのではないかという反省を迫ることになった。この問題意識をもっとも鮮明に打ち出したのが丸山眞男であることは言うまでもない。すでに戦中に、丸山は福沢諭吉が日本思想史に出現したことの意味を「国家を個人の内面的自由の媒介せしめたこと」と要約し、彼は、「個人主義者であることに於いてまさに国家主義者だったと評していた（138頁）。



松本礼二 著『知識人の時代と丸山眞男：比較20世紀思想史の試み』（岩波書店，2019年5月23日）

#### 4 経済大国と新たな「個人主義」の擁護—山崎正和『柔らかな個人主義の誕生』—

1970年代の終わりから80年代にかけて、個人主義の問題があらためて問われ、論壇の話題となった（140頁）。

1人1人が自らの人生を選ぶ余地が広がり、（…（中略）…），しかも高齢化社会の中で長くなった人生のさまざまな局面で頻繁に選択を迫られることとなる。山崎正和はこれらの現象の中に個人を「個別化」（…（中略）…）する傾向の増大を見て取り，そこに新しい「個人主義」，「柔らかな個人主義」の可能性を見るのである（142頁）。

山崎の中心的関心は文化にある。『柔らかな個人主義の誕生』の議論，少なくとも著者のオリジナルな見解の大部分は文化現象に関わるものといっていよい（146頁）。

能や俳諧の世界に「柔らかな個人主義」の原型を求める山崎の議論の核心は，そこでは誰もが自己を表現する主体であり，それは当然観客の存在を前提するから「顔の見える隣人」との社交なしにはあり得ないという主張である（148頁）。

トクヴィルを引き合いに出すと，「柔らかな個人主義」という表現はトクヴィルの「穏やかな専制」を少し連想させる言葉である（151頁）。

トクヴィルは，デモクラシーの平準化，画一化傾向にもかかわらず，否，だからこそ「ごく狭い仲間集団」，「小さな私的社會」が無数に生まれるとし，それはむしろ人々を公共生活からいっそう遠ざける要因になるとも警告している。このようなトクヴィルの観点からすると，「柔らかな個人主義」が「顔の見える隣人社会」をともなって広がったとしても，それだけでは國家の官僚的支配（穏やかな専制）と矛盾しないということになるのではなかろうか（152頁）。

おわりに

1980年代の日本經濟の絶頂期に，山崎正和がバラ色に描いた「消費社會の美学」に酔いしれるわけにはいかないのは確かであろう（153頁）。

幕間の補論 翻訳と翻訳文化について

##### その1 政治思想のガラパゴス的進化について

日本の市民社會論は「一國市民社會論」の様相を色濃く宿していた。にもかかわらず，古典的な學問的概念の政治化の先例として，日本の事例が現代の市民社會論を考える比較の対象たり得ることも否定できない。思想史においても，ガラパゴス的進化は進化の一般理論を考える参考になるのではないか（169頁）。

その2 翻訳の功罪——3つの訳語を事例に

水村美苗氏の『日本語が亡びるとき』(水村, 2008)という本があります。英語の世界支配の現実の中で日本語の将来を考えた本ですが、言語の問題だけでなく、日本の近代文学の行く末を案じています(180頁)。

今日、翻訳の問題を考えるとすれば、外国の研究成果をいかに正しく理解し、取り入れるかだけでなく、逆の問題も考慮する必要があると思います(184頁)。

その3 翻訳と政治思想——トクヴィル『アメリカのデモクラシー』の場合

近代日本はヨーロッパ諸国(……(中略)……)を通じて西洋文明を摂取したわけですが、それらの言語は通用地域において現に話されている生きた言語でありながら、日本では近代ヨーロッパ人にとってのラテン語やギリシャ語のような古典語に当たる役割も果たしました。外国語の習得は異邦人と直に接するコミュニケーション能力の獲得であると同時に、それまで大多数の日本人にとって未知であった西洋の学術文化を学習する手段でもありました(188頁)。

(翻訳によって)自然科学や実用技術の面では世界に通用する人材と業績が生まれ、なにより世界有数の経済大国になったのは事実ですが、言語の違いがより多く作用する精神文化、人文・社会科学の領域は別です。この領域でも近代日本は欧米の学問を貪欲に吸収し、多くの分野で相当の学問水準を達成しましたが、研究成果は今日なお日本語で国内需要向けに発表されるものが圧倒的多数で、世界に知られるものは少ない。翻訳も入超状態は大きく変わっていません。(……(中略)……)その結果、(……(中略)……)一方で欧米の学問成果に学びつつも日本にしか通用しない理解が広がっているのではないかという疑問が生じ、他方では日本の現実と無縁な欧米産の理論で日本を裁断することへの反発が生まれました(丸山眞男のいわゆる「実感信仰」と「理論信仰」の対立はこの問題に関係しています)(188-9頁)。

(トクヴィル『アメリカのデモクラシー』の)提起したさまざまな問題の中でも、現代デモクラシーにおいてあらためて浮上した論点として「個人主義 individualisme」をめぐる議論があります(194頁)。

トクヴィルの言う「個人主義」は他者とのつながりを見失って公共的関心を喪失し、家族と友人だけの狭い私生活に閉じこもる傾向を意味し、後の言葉で「私化 privatization」と言い換える方がはっきりするかもしれません。……(中略)……戦後の日本では、欧米との対比で、日本人は集団主義にとらわれ、主体的個人が確立されなかったのが問題だという論調が強かったのですが、1980年代になると、西洋近代をつ

松本礼二 著『知識人の時代と丸山眞男：比較20世紀思想史の試み』（岩波書店、2019年5月23日）

くった禁欲的生産倫理（ウェーバー、大塚久雄）としての「硬質な個人主義」は高度成長後の消費社会には時代遅れになり、現代に適合的なのは「柔らかな個人主義」（……（中略）……）で、その伝統は室町時代以来日本にこそあったという山崎正和の議論が話題を呼びました（195頁）。

ロバート・ベラーの『心の習慣』（ベラー、1991）という本は、（……（中略）……）トクヴィルの「個人主義」の概念を導きの糸としてアメリカ文化の考察をしています。この本の描き出すアメリカ人の個人主義はトクヴィルの言う意味から微妙にずれているという印象を禁じ得ません。トクヴィル自身は個人主義を民主社会の構造に起因する普遍的現象と見ていますが、アメリカでは政治参加や結社活動を通じて社会のつながりが保たれ、個人主義の弊害が目立たないと強調します。……（中略）……ところが、ベラーの本が出た1980年代になると、アメリカでも「ミーイズム」の蔓延が嘆かれ、さらに21世紀に入ると、現代のアメリカでは結社の伝統が廃れてトクヴィルが恐れた個人主義の弊害が目立つと論じたロバート・パットナムの『孤独なボウリング』（パットナム、2006）がベストセラーになりました（196頁）。

重要なことは、翻訳を通じて外国文学が実作に影響を与えたことです。言文一致以来の日本における近代文学の成立は外国文学の翻訳抜きに語れません（199頁）。

残念ながら日本の社会科学について同じように言うことは憚られます。つまり、言語環境は同じでありながら、文学の領域は「ガラパゴス化」から免れているのです（200頁）。

## 第Ⅱ部 丸山眞男を読むために

### 第6章 丸山眞男と日本の自由主義

丸山の自由主義的思考は、彼自身の国の非自由主義的伝統、日本国民の精神を無意識のうちに拘束し、自称自由主義者の多くもその影響を免れ難かった伝統に対する鋭利な批判に顕著である（207頁）。

丸山は、戦後の知的活動を、日本国民から自由を奪い、戦争に駆り立てた軍国主義と、超国家主義のイデオロギーに対する批判から始めた。しかしながら、同時にまた、戦後の精神的開放は、丸山に、日本における忘れられた自由主義の潜在力の発見をも促した（212頁）。

丸山は、もちろん、共産主義とマルクス主義に無批判ではなかった。マルクス主義の思考様式に対する徹底した批判は、『現代政治の思想と行動』所載の長い論文『『スター

リン批判』における政治の論理」に示されている（217頁）。

#### 第7章 丸山眞男と戦後政治学

学問知と市民常識との相互補完と有機的結合を求める点でも、丸山は福沢の真正な後継者であった（232頁）。

政治学には専門科学の1つにとどまり得ぬ側面があると丸山は強調する。第1に、ゲーテの「医学は人間の総体を扱うものであるから、人間の総体でもって」取り組まねばならぬという言葉を引き、これはそのまま政治学にも当てはまると丸山は言う。第2に、政治学者には、J・S・ミル（もしくはT・H・ハクスリー）の言う教養人の資質、「すべてについて何事かを知り、なにごとかについてはすべてを知る」ことが求められる。……（中略）……そこに丸山眞男の政治学があり、彼の時代がある（232頁）。

（丸山眞男『政治の世界 他10篇』〔岩波文庫、2014年〕「解説」）（233頁）。

#### 第8章 丸山眞男はトクヴィルをどう読んだか——冷戦自由主義者との対比において

丸山自身「断想」と題するエッセーの中で「トクヴィルを大衆デモクラシー時代の予言者と見ることに問題がある」と留保しているが、「大衆の時代の予言者」の副題を持つJ・P・メイヤーの先駆的なトクヴィル論をドイツ語原本で熟読しているのは確かである（241頁）。

丸山のファシズム研究は、「民主的共和政が、専制を、少数の者にとっては一層重苦しいものにしながら、大多数の者の目からは醜悪な面や低劣な性質を隠してしまうことを警戒しよう」というトクヴィルの警告を20世紀の現実の中で再確認するに至ったのである（245頁）。

#### 第9章 書評『忠誠と反逆——転形期日本の精神的位相』（丸山眞男著、筑摩書房、1992年）

『忠誠と反逆——転形期日本の精神的位相』に収められた8篇の論文はいずれも丸山の旧作である。もっとも古いものは、1949年の初出、一番新しい「日本思想史における問答体の系譜」でさえ、発表後すでに10年を超える（247頁）。

一言でいえば、文化接触の諸相を、幕末維新を生きた個人（知識人、政治指導者）の思想と行動、また民衆の意識の中を探ること、これが全篇を貫く問題関心をなす。そして、古代律令国家における中国文明と仏教の摂取以来、日本史上例を見ない規模でなされたこの外来文明の受容は、当然のことながら、伝統的思考範疇の意識的転用、また意識されざる伝統の拘束なしにありえなかった。西洋文明の摂取に果たした伝統の役割、

松本礼二 著『知識人の時代と丸山眞男：比較20世紀思想史の試み』（岩波書店、2019年5月23日）

これが第2の関心対象である（248頁）。

規範や道理の立場から歴史を裁くのではなく、超越的理念の実現を歴史に見るのでもなく、すべてを「時勢」に解消する歴史的相対主義とそこから来る日々の「現在」の絶対化、これが著者の言う日本の歴史意識の特色である（250頁）。

本書を通読してあらためて強烈に印象付けられるのは、幕末維新の精神史に対する著者（丸山）の問題意識が、敗戦をはさむ戦前戦後という著者自身の生きたもうひとつの「転形期」の思想状況と不可分に結びついていることである（252頁）。

あとがき（省略）

人名索引（省略）

### 3. 知識人の20世紀思想史

著者松本によれば、フランスでは、1960年代以後、高等教育の大衆化が本格的に進み、他方では情報化社会によって活字メディアの重要性が低下したことは、少なくともこれまでのような形での知識人の生存環境を悪化させたといわれる。いまや知識人は「絶滅寸前の種」、「最後のモヒカン族」だ、と言う者さえいる。だから、保護の手を加えねばならぬと考えるか、レジス・ドブレ Régis Debray のように自然淘汰に任せるべきだとするかは、意見が分かれるだろうが、と述べている（12頁；ドゥブレ／ジエグラー、1996）。

ただ、「意見が分かれるだろうが」と著者に独り言のように言われても意味不明である。そこで、松本が参照した文献にあたってみた。ドブレはフランスの作家としてあまりにも有名であるが、ジャン・ジエグラー Jean Ziegler はスイスの社会学者であり、政治家でもある。さて、ドブレは次のように述べる。

「知識人とは、ふつうに考えれば、自分の住む都市の公的なことがらに口を出し、自分の意見を発表する人間のことだ。知識人という言葉を生み出した、あのドレフュス事件 Affaire Dreyfus 事件を思い出せばいい。つまり、知識人は新聞記事から生まれ、新聞によって作られたのだ。だから、知識人とは、とどのつまり、作家でもなければ学者でもない。……（中略）……これまで長い間、ぼくはフルタイムの知識人だった。ラテンアメリカで解放運動の活動家だった時、ぼくは作家でも学者でもなかったが、知識人だった」（ドゥブレ／ジエグラー 1996, 21）。

「結局のところ、ぼくらの声が届くのは、本を読むほんの少数の人々なのだ。大多数の連中は、みんなそれぞれ公認の精神的導師についている。それらはまさに導師

gourou であって、知識人とは名ばかりの連中だ。メディア市場の法に従順そうしたイデオログたちは、いたるところにうんざりするほど沢山いる。個人的には、ほくは、今、自分の片隅での仕事を大切にしたい」(同, 22)。

途方もない比較であるが、1961年頃から学問に専念した丸山とドブレは、1面似たところがあるのかもしれない。もう少し、ドブレの発言の引用を続ける。

「知識人が集まって新聞や雑誌を出すという時代は終わったのだ。何故なら、なんといてもまず第1に、人々はますます新聞雑誌を読まなくなっている。1914年には、パリに新聞が80あった。今ではもう6つくらいしかない。新聞雑誌の読者層のこうした危機的状況からすると、われわれはたぶんテレビ局でも作らないといけないのかもしれない」(同, 24)。

「現在、世界は不透明で、なにが起こるか分からず、われわれは手を拱いて見ている。何が終わろうとしているのかは分かる。しかし、正直言って、何が始まろうとしているのか、ほくには分からない。終わろうとしているものは、大まかに言って3つだ。1つは活字文化の数百年の長い歴史だ。……(中略)……今われわれは活字文化の世界ではなく、映像文化の世界にいる。もう1つは、1789年のフランス革命に始まった歴史だ。これも残念だが、どうやら今終わろうとしているらしい。そして、最後に、短かったとはいえ、1917年に始まった革命的社会主義の歴史だ。世界を意思の力で変えようとしたこの運動は、ついこの間、悲惨な終末を迎えた。この3つの歴史が同時に終焉したのだ」(同, 26)。

小さなコメントを付けると、「ついこの間」とドブレが発言したのは、フランス語の原書が刊行された1994年である。それにしても、活字文化の終焉宣言を丸山はどう考えるであろうか。そう言えば、丸山の言説には、喜劇王チャールズ・チャップリン Charles Chaplin など、映画からの話がよく使われている。映像文化の世界を丸山ならどう論じるか、知りたいところである。もう1つだけ、ドブレの主張を引用しておきたい。

「ほくが思うに、われわれ知識人の仕事は、現実を少しでも正確に解読する仕方を教えることだ。……(中略)……例えば、サラエボ Sarajevo へちょっと行ってカメラをくるくる回し、大使館の報道担当者を使ってわっと仕事して帰って来るのは、ナンセンスそのものだ。もし出かけるなら、とことんやらなければならない。特権的な人間としてではなく現地にとどまるべきだ。また、もし出かけないのなら、図書館に閉じこもって仕事をしなくてはならない。これまた特権的な人間としてではなく、学生のように最後

松本礼二 著『知識人の時代と丸山眞男：比較20世紀思想史の試み』（岩波書店、2019年5月23日）

にレポートをきちんと出すべきだ。そのいずれかであるべきなのだ。そして、いずれにしても、われわれ知識人は地の塩ではありえないだろう……（同、27）。「ナンセンスそのものだ」というドブレの喝破に、丸山は膝を叩いて賛意を表するのではないかと評者はひそかに想像している。

#### 4. 日本の知識人について

著者松本によれば、1930年代以後の日本の状況は、時代に流されず、普遍的知性の立場を守ろうとする限り、権力の弾圧に直面するのみならず、大衆の意識からの疎隔と緊張を覚悟せざるをえない状況に知識人を追い込んだ（38頁）と言う。ここでは、「大衆の意識からの疎隔と緊張」を問題にしてみたい。

アメリカの歴史学者で、日本占領研究の第一人者であるジョン・W・ダワー John W. Dower は、丸山の「疑似インテリ」という議論が、「本物のインテリ」の中にたしかあった戦争協力を看過させる方向に働いた、と批判した（同）。

その批判の内容に触れる前に、ダワーのキャリアを紹介してみたい。ダワーは、アメリカのマサチューセッツ工科大学を退職するにあたって、『朝日新聞』（2010年5月21日）のインタビュー「教授が歩んだ戦後日本」に登場した。以下はその抜粋である。

「修士論文には森鴎外を選びました。文学者であり、官僚であり、軍医総監まで務めた非常に優れた個人です。中国の古典にも西洋の言語にも通じ、伝統と格闘した森鴎外を通じて近代日本を理解しようとしたのです」。

「私はカトリックとして育てられ、保守的な人間でした。……（中略）……そういう私でも、自分の国がベトナムで行っているのは残虐な戦争だということは分かりました。アメリカのデモクラシーとは何なのか。日本がアジアでしたことと同じことをしているではないか。しかも私が大好きになった日本が今回はアメリカの側についている。鴎外研究では答えは出ない。今起きていることを理解するために歴史を学ぼうと思いました」。

「60年代後半から70年代にかけてはベトナム反戦だけではなく。……（中略）……日本に来てみると、ベ平連などの市民運動、反公害闘争、学生運動などが高まっていました。国家や社会の暗い側面が見えて来ました」。

「問題を抱えながらも、日本の強さはデモクラシーであることです。自分の考えを自由に発表できる社会を築いたことにあります」。

ダワーのインタビュー抜粋は以上であるが、丸山への批判は当たっていると思われ

る。それにしても、丸山が森鷗外をどう評価するか知りたい気がする。

さて、話をもとに戻して、ダワーの言説をたどってみたい。彼は次のように言う。すなわち、西洋の学者は、實際上、戦争直後に丸山眞男によって推し進められた、戦間期日本のファシズムと侵略への支持は、主としてブチ・ブルジョワジーとその他の非エリート層から調達されたとする非常な影響力を持った議論を批判して来た。それとは反対に、知識人、政治家、マス・メディア、第1次世界大戦後一流大学で教育を受けたテクノクラートら、丸山によってはほとんど批判されることのなかった人々が、1930年代の悲劇が展開される上での積極的な参加者であったという見解がますます有力になりつつある（ダワー 1995, 75）。

ダワーによれば、丸山の共感的批評家であるアンドルー・バーシェイ Andrew Barshay は、丸山の非エリートへの注目が1920年代と1930年代のコミンテルンの批判と一致している事実に着目していると言う。ダワーは、「バーシェイは、1992年に次のように書いている」と、上記のダワー言説の注としてバーシェイ言説を以下のように引用する。貴重な見解なので孫引きになるが、ここに引用しておきたい。

すなわち、丸山の分析は率直に言って、以下の2つの点で問題である。1つは、それが、出世においてかくも学閥が影響する帝国において、テクノラートと「知識人」全体が演じた役割を無視していること。より詳しく言えば、「真の」知識人による抵抗の表現をむなしく探し求めるうちに、丸山は彼の同僚であるエリートにきわめて典型的であった「反動的モダニズム」の分析を怠ったのである。そのような分析がなされていれば、彼の「上からのファシズム」という空疎な洞察に知的内容が付け加わっていたことであろう（ダワー 1995, 86）。

最近よく言われるようになった「上からのポピュリズム」にも似て、「上からのファシズム」という発想は、必ずしも空疎ではないと評者には思われるが、ダワーの批判はたしかに的確である。第2次世界大戦後の丸山の言動に向けての彼の批判も手厳しいものがある。

ダワーによれば、丸山は、1949年の文章の中で、「肉体文学」とは、戦争中の異常な出版物や、以前からある「私小説」が肉体性に固執したのと同質だといい、さらに戦後の物欲第1の「肉体政治」と変わらないとさえ述べている。肉体文学は、人間の浅ましさを誇張したもので、「奔放のように見えて実はおよそ平凡な世界をはいまわっている」のであった。こうした状況は、丸山の目にはじつに不吉であり、『肉体』文学と『肉体』政治はどちらも何とか始末しなけりゃ、民主主義も文化国家もあったものじゃない」の



松本礼二 著『知識人の時代と丸山眞男：比較20世紀思想史の試み』（岩波書店、2019年5月23日）

であった。（ダワー 2004、188）。

ダワーの丸山評価があたっているかどうか、著者松本に聞いてみたいところであるが、それは評者の今後の宿題とさせていただきますとして、ここでは、『朝日新聞』（夕刊）2020年11月4日版に取り上げられた「時代の葉：田村泰次郎『肉体の門』（1947年）：戦後のニヒリズムと欲望」をここで紹介してみたい。

『朝日新聞』編集委員小泉信一は次のように言っている。『『肉体の門』は、そのタイトルから大衆向けの風俗小説という見方をする人が多かった。だが、コロナ禍で閉塞感が強まり、自殺者も増えつつある現在、同書に描かれたあふれるような生命力、獣のような営みは、もっと注目されていいのではないか』。

この特集記事には評論家佐高信も次のような談話を寄せている。「敗戦後の貧困や混乱の中で偉そうな『思想』が何の役にも立たず、『肉体』こそが人間の生きる根拠だと田村泰次郎は訴えました。（…（中略）…）観念やプライドだけで生きているインテリを足払いするような迫力が『肉体の門』にはあるのです。思想にがんじがらめになった者たちへの反逆かもしれません」。

佐高の発言にも一理あると評者は思う。ただし、振り子の振りすぎというか、過激すぎると言うか、彼の、「偉そうな『思想』」とか、「男たち敗けてがっかり意気消沈」とか、『『死』を美化した男たち』といった発言は言い過ぎであり、本書評のテーマである丸山眞男にはまったく当てはまらない。

そこで、今度は、戦前から戦後にかけて丸山眞男のスタンスを鶴見俊輔はどう見ているのか、という問題を立ててみたい。その場合鶴見と評論家関川夏央との対談集（鶴見・関川、2011）を材料に使いたいのだが、最初の手掛かりにあたるものとして、関川が書いた「あとがき」にあたる「鶴見俊輔先生の敗北力」が興味深い。そこでその1部を紹介する。

すなわち、関川によれば、鶴見俊輔も高等師範附属の生徒であった。そしてその同級生には、たとえば家業の中央公論社をうけついで嶋中鵬二、東工大教授を長くつとめた永井道雄、前衛短歌運動を盛り立て、のちに伝説的存在となる推理小説も書いた中井英夫などがいた。そのまわりに年少の賢い美少女たち、嶋中雅子や一時澁澤龍彦夫人であった矢川澄子などがいた。丸山眞男は府立1中出身だが、吉野源三郎は高師附属の大先輩である。それは中流以上の東京の家庭と特権的な学校を中心とした、戦前の都会文化の厚みを感じさせる豊かな円環であった。そこに不良少年鶴見のアメリカ留学という劇的な要素が無理なく添えられる（鶴見・関川 2020、279）。さて、以下、「対談」は次

のように展開されるが、多少の編集、削除があることをあらかじめお断りする。

関川 丸山眞男が講演で、吉本隆明にはちゃんとした学歴がないと、からかったことがあったそうですね。

鶴見 東大の中でも有名な話。「ファシズムというものは、亜インテリが作った」。これは正しいでしょう。そのことを例証していくんだけど、丸山さん、勇み足なんです。「皆さんは東大に受かっておられるんですから、亜インテリではありません」とね。これは、わたしは引かかる。「東大に入っているから亜インテリなんじゃないか」。そう言い返したい。

関川 『君たちはどう生きるか』の岩波文庫版にはその丸山眞男が解説を書いています。これは非常にいい解説です。

鶴見 当時、東大助手である丸山眞男さんが『君たちはどう生きるか』をリアルタイムで読んで、たいへんな本だと思ったことがすごい。わたしは、ハーバードの1年生のとき、偶然、見かけたんだ。置いてあった。おそらく、日本人の医者が持って来たものだと思う。それを讀んだからもうびっくりしちゃった。こんな本を日本人は書くのか。すごい人が出たと思った。吉野源三郎の転向体験があそこに書かれている。

関川 しかし、子どものころに良書として薦められたときには反発しましたよ。こんないいうちの子どもが集まっている環境は全然リアルじゃないな、と。そういうことを、先日『日本経済新聞』に書きましたら、矢川澄子さんから、亡くなるちょっと前なんですけれども手紙をいただいたんですよ。「自分は、学校は違うけど、ああいうふうな高等師範付属のサークルのなかにいた」「だけど、地方の子がそういうふうに通むとは夢にも思わなかった」と。

鶴見 矢川澄子の父親は進歩的知識人なんです。彼女は、娘のころ、お父さんはなんて偉い人なんだろうと思って讃嘆の心を持って生きて来た。ところが、戦後になって変わったんだ。いわゆる知識人といわれる人に疑いを持った。

関川 本は、長い間に何度も読むとそのたびに味わうものが違い、発見があるでしょう。『君たちはどう生きるか』もそうでしょう。大人になって読み直してみると東京の子への嫉妬心は薄れるし、丸山眞男の解説の意味もわかった。同時に、「これを書いた丸山さんが、1番病でもあるのか」と複雑な思いを持ちました。

鶴見 丸山は「1番病」ではないでしょう。丸山は成績が悪くて、1番になったことがない。努力して、1中から1高に入った。

関川 本当ですか。

松本礼二 著『知識人の時代と丸山眞男：比較20世紀思想史の試み』（岩波書店、2019年5月23日）

鶴見 あなたが、吉野源三郎についてというような感想なんです。「そんなもの、よそへ行ったら全然違うんだ」と…。矢川さんではないが、「世田谷の女の子だ」ということはなんともしょうがないね。生まれ育った家を全く否定することはできないことなんだ（笑）。

関川 相変わらず厳しいですね。

鶴見 だいたい1番になる人は、見識がないんだよ（笑）。そうそう。転向と1番病は相互依存。（鶴見・関川 2011、212-221）。

なぜ、評者はここまで長々と引用を重ねて来たのかといえ、それは、「丸山によってはほとんど批判されることのなかった人々が、1930年代の悲劇が展開される上での積極的な参加者であったという見解がますます有力になりつつある」というダワーの主張は、あまりにも単調ではないかと思うからである。たしかに、丸山にその自覚はなかったかもしれないが、吉野源三郎の転向に気を遣う気持ちを持っていたことは推測できるし、鶴見の言う「生まれ育った家を全く否定することはできない」という深い意味を、評者は理解したいと思う。そして鶴見の言う「転向」の問題がダワーのいう「反動的モダニズム」に影を落としていたのではなかったかと推測してみたいのである。

## 5. 21世紀の自由と個人主義

著者松本によれば、1945年以降の日本の「戦後啓蒙」、とくにいわゆる「近代主義」の言説における個人主義の問題について詳細に立ち入る余裕はないが、2点だけ指摘しておきたいとして、著者は次のように述べる。すなわち、1つは主体性の問題、個人と組織の問題はアンシャンレジーム批判の論点だけでなく、左翼運動の側についても問われたという事実である。実存主義がマルクス主義に提起した「主体性論」、雑誌『世界』の座談会「唯物史観と主体性」、『近代文学』派が提起した「ハウスキーパー」問題に典型的に見られるプロレタリア文学の政治主義批判などにそれは表れている。第2は、ベネディクトの『菊と刀』の受容とも絡んで、西洋の個人主義と日本の集団主義との対象という文化論におけるステロオタイプがこの時期に成立し、その後いわゆる日本文化論ないし日本人論において繰り返し議論されることになったという事実である（139-40頁）。

評者のコメントとして、第1については、「左翼運動の側」におけるいわゆる「新左翼」の流れの中で、学生時代の評者なども、梅本克己や、『新日本文学』、平野謙などを読み漁った経験がある。問題は2である。「西洋の個人主義と日本の集団主義」はいまだに形を変えて問題であり続けているのではないか？ あえて、評者のスタンスを結論

的に示せば、評者は反対の側から考えて、「日本の個人主義と西洋の集団主義」という問題を今後考えてみたいと思っている。

もっと乱暴に単純化すれば、どうしたら「柔らかな個人主義」ではなくて、「硬い強固な個人主義」が日本においてどのようにしたら形成できるのか、という問題。「西洋の集団主義」については、「福祉国家と福祉社会」が考えられる。宗教、あるいは共産主義が力を失った西洋は、どのようにして信頼しあえる社会の人間の連帯を築いて行くのか、大きな問題になって行くのではないだろうか。そして、この2つの問題はもちろん根底において繋がっている。

さて、ロナルド・ドーアは、彼の著書のはしがき「なぜいま個人主義を問うか——日本の皆さんへ」で次のように述べた箇所がある。少し、引用してみたい。「いまや、われわれは集団主義的協力を通じて——地球全体という規模での協力を通じて——ペストなどさまざまな伝染病を制圧できるようになった。しかし、……（中略）……人を殺し地球を破壊する手段を持つようになったわれわれは、21世紀において、ペストなどと桁違いの規模の集団死滅の脅威にさらされていることである」（ドーア 1991, 5）。もちろん、文脈から言って、ドーアの言説は現在進行中のコロナ禍を予言したものではなく、ただ、牽強付会の気持ちなど少しもないのであるが、奇妙な偶然を感じることは事実である。

実業家にして、著作家、翻訳家である加藤幹雄によれば、「訳者まえがき」において次のように言う。すなわち、ドーアは、個人主義の興隆を肯定的に評価する基本的立場を取りながらも、個人主義が人間の絆の喪失、すなわち不平等の拡大による人間コミュニティの崩壊につながる危険性を内包していることについて警告することも忘れない。個人と集団との間にどのようなバランスを保つべきか、という問題は、人類社会の永遠の課題なのかもしれない（ドーア 1991, 9）。

加藤は続けてこう述べる。劇作家で評論家の最近物故した山崎正和について、『柔らかな個人主義の誕生』（山崎、1987）の中が示しているように、日本社会にも消費者型の台頭が認められるのは確かである。しかし、……（中略）……西欧社会の個人主義は、もともと生産者としての個人が選択的に自我を追求できる自由という価値観を土台に発展して来たものであり、現代日本人の行動に顕在化しつつある個人主義的な傾向とは異質なものである（ドーア 1991, 9-10）。

## 6. 丸山眞男論

著者によれば、丸山が、マッカーシーの時代のアメリカを念頭に、自由民主主義体制

松本礼二 著『知識人の時代と丸山眞男：比較20世紀思想史の試み』（岩波書店、2019年5月23日）

の内部からファシズムに類する運動が生まれる危険を論じたのは、「ファシズムの諸問題」（1952年）、「ファシズムの現代的状況」（1953年）の2作品である。ここで、丸山は、「ファシズムは20世紀における反革命のもっとも鋭い形態である」と規定したうえで、枢軸諸国のファシズム体制が消滅した戦後の世界では、自由民主主義の総本山アメリカこそがロシア革命とボルシェビズムという「20世紀の革命」に対する反革命の拠点となったとして、「自由の名の下における強制的等質化」の進行に警鐘を鳴らしている（242頁）。

詳しく論証する余裕はないが、丸山が上記2作品を執筆した1950年代前半の時期は、「ロシア革命とボルシェビズムという『20世紀の革命』」を擁護する雰囲気、知識人や文化人に濃かったように、後の世代の評者には思われる。

それにしても、1930年代のヨーロッパと日本に劇的に生じたファシズム現象が戦後のアメリカを舞台に繰り返される恐れはないのか、これが「ファシズムの諸問題」と「ファシズムの現代的状況」いう2つのエッセーを貫く丸山の中心的な問題関心であった、と著者は言う（243頁）が、同感である。すなわち、丸山には、マッカーシズムへの憂慮のようなものが大きかったのではないだろうか。マッカーシズムはポピュリズムに似たものを持っているというのが評者のイメージである。丸山だったらトランプ大統領のアメリカについてどのように評するであろうか、いろいろ考えて行きたいというのが評者の心境である。

アメリカ政治が専門の政治学者古矢旬によれば、丸山がしばしば口にした「マッカーシズムはアメリカの国体明徴運動です」という警句が示唆するように、丸山が目指するのは、マッカーシズムの政治・経済の制度ではなく、社会心理であり、マッカーシー主義者の論理と精神形態であり、支配機構内部のファッショの指導者に呼応する社会運動とイデオロギーである。丸山は、何よりも「強制的同質化」による世論の画一化や少数異見の抑圧による表現の自由の逼塞のうちに、ファッショ化の表出を見るのである。そして、この機能としてのファシズムの表出を促した決定的な条件が、冷戦の激化であり、東西のイデオロギー対立であった（古矢 2015, 562-3）。

古矢の解説はまだまだ続く。こちらの方が評者の言う「岐路に立つ現代デモクラシー」として世界的規模の問題となっている『ポピュリズムという挑戦』（水島、2020）に関連する。かまわず引用を続けたい。

丸山の危惧にもかかわらず、幸いなことにマッカーシズムは短命に終わった。しかし、丸山は「ファシズムの現代的状況」末尾において、ほかならぬ最先進資本主義国の内に、

ある種の新しいファシズムの生育にとって好適な1条件を見出している。すなわち大衆消費社会とマス・コミュニケーションの帰結としての、「知性の断片化・細分化」である。そこに登場して来る操作可能性の高い大衆こそは、非強制的同質化、あるいは自発的画一化を自身では意図せぬままに推し進めてしまう存在とならないかという疑念が、おそらく今日のネット社会まで届く丸山のメッセージである（古矢 2015, 563）。

古矢の言うように、「非強制的同質化、あるいは自発的画一化」がはかりなく進められている『ポピュリズムの現代』（土倉, 2020）において、丸山のメッセージをあらためて噛みしめてみたい。

## 7. おわりに

本書で著者松本はこう書いている。「かつて小田実は、日本の知識人と違ってフランスの知識人には『フランスの』という自覚なしに、自分を語ることがそのまま知識人一般を論じていることになると思ひ込んでいた節がある」（8頁）。

鶴見は小田についてこう述べている。「彼の活動を思うとき、『日本』と『日本国』との区別が、小田実にあっては、明治、大正、昭和の日本人とは違っていることを感じる（鶴見 2016, 216）。これは本書の第1章で著者松本が述べていることと重なるであろう。

鶴見は続けてこう言う。「ベトナム反戦運動が熱気を帯びて大きくなると、ベ平連の中でも、もっと強く党派的なものを求める傾向は出て来た。…（中略）…そういう状態に対してやんわりとおさえる役割を果たしたのは、小田実のパーソナリティだった」（鶴見, 同）。パーソナリティという言葉で鶴見の言わんとすることは、「指導力」ということではないか、と思う。しかし「指導力」は「ヘゲモニー」という言葉に置き換えることもできる。そうすると鶴見は、小田実が「現代日本の知識人」と言わんとしているのだろうかと推察している。

さて、話を丸山眞男に戻す。加藤典洋によると、鶴見俊輔は、2011年10月に脳梗塞で倒れた。そして、2015年7月20日に亡くなるまで、1992年に書き始められた『もうろく帖』を書き続けたが、その第18冊（2011年4月15日）に「丸山眞男と竹内好」という短文を記した。その短文を紹介したい。

それによると、鶴見によれば、「丸山眞男と竹内好を組みとして見ること。『丸山眞男手帖』の『楽しい会』の記録で丸山はくりかえし竹内好は親友だと語っている。丸山眞男は自分の談話を引用されることを嫌ったが、その談話に丸山さんの真骨頂があらわれている。反対に丸山門下から丸山にさかのぼるとき、ひらめきはあらわれない。福沢論

松本礼二 著『知識人の時代と丸山眞男：比較20世紀思想史の試み』（岩波書店、2019年5月23日）

吉一丸山眞男、また荻生徂徠―丸山眞男の線上にみるとき…（中略）…かえって丸山眞男のひらめきはあきらかになる」（鶴見 2016, 219）。

しかしながら、一步譲って、評者に限って考えてみても、評者は多数の丸山門下の人たちから学恩を受けている。その方たちは、学者としても、思想家としても、知識人としても優れた人たちがばかりである。

付言すれば、小田実のパーソナリティを鶴見は評価するが、丸山を優れた知識人しているのは、丸山眞男のパーソナリティである。評者は丸山眞男と竹内好の交友のことを言っている。この場合の「パーソナリティ」は「人柄」と言ってもよいかもしれない。

重ねて付言すれば、「丸山眞男は自分の談話を引用されることを嫌った」と鶴見は言っている。実は評者にとっては耳の痛い話であるが、同感である。丸山眞男の文章には談話の引用など見た記憶がない。ただ、ここで言いたいことは、そのことではない。すなわち、「談話に丸山さんの真骨頂があらわれている」と鶴見は言うが、そのとおり丸山は座談の名手であり、饒舌である。飛躍するが、「話す能力」という発言力は、メディアの発達した現代においては、知識人の必須条件ではないだろうか。

評者もタイトルに「丸山眞男」が出て来る短文（土倉、2002）を18年前に書いたことがある。僭越であるが、おわりにあたって、1部分、以下再録させていただきたい。

戦後日本の偉大な政治学者、日本政治思想史研究の巨匠であった丸山眞男氏が逝去されてから1年になろうとしている。丸山シンドロームといってよいほど、著作集、座談、備忘録などの故人の作品が続々と刊行されている。さらに、「戦後啓蒙と丸山政治学」といった類のシンポジウムや評論も相次いでいる。

ところで、丸山眞男氏が日仏政治学会会員であったことは知人ぞ知るである。事務担当の会員の1人が、丸山氏の律義な出欠通知について、『会報』に書いている。おそらく丸山氏は「学界という見えない共和国の市民としての徳」を発揮されたのだと思う。

丸山氏が、フランス政治学に、なぜ、そしてどんな興味を持っていたのか。著作集や座談をよく読んで考えてみたい。思いわたるキーワードは、「精神貴族」あるいは「トクヴィル」であろうか。私見であるが、丸山氏はフランス革命の獲得物だけでなく、それによって失われたものにも愛惜があったものと理解したい。

以上であるが、後日談を書かせていただくと、当時の日仏政治学会会長は元フランス大使の故中山賀博氏であり、筆頭幹事は舩添要一氏だった。舩添氏が中山氏のことを「大使!」と呼んでいたことも懐かしく思い出されるが、それはともかく、丸山眞男と中山賀博は1高、東大の同級生だったことを事務担当の会員から聞いた。評者の考えす



ぎだったのかもしれないが、それほど外れてはいないと思うだけでなく、おそらく中山の招聘に応じた丸山の暖かい「パーソナリティ」を評者はしみじみと感じている。

最後に、著者松本も、仙台で開催されたこの日仏政治学会で、この頃講演をした記憶がある。テーマは「トクヴィル」であった。評者には難解だった。実は、これが言いたかったのだが、著者の2冊の名著、『トクヴィル研究』（東京大学出版会、1991年）、『トクヴィルで考える』（みすず書房、2011年）も難解である。それでは、そのトクヴィル研究第1人者が書いた「丸山眞男論」はどうだと言われると、答えに窮する。なぜなら、「これはよく分かった」と答えると、「それにしては、この『書評』はなんだ!」と言われそうだからである。

### 参考文献

- 加藤典洋（2016）,「解説」,鶴見俊輔『敗北力—Later Works』所収,  
鶴見俊輔（2016）,『敗北力—Later Works』,編集グループ SURE。  
———・関川夏央（2011）,『日本人は何を捨ててきたのか：思想家鶴見俊輔の肉声』,筑摩書房。  
土倉蒼爾（2002）,「丸山眞男と日仏政治学会」,『日仏政治学会会報』。  
———（2020）,『ポピュリズムの現代—比較政治学的考察—』,関西大学出版部。  
古矢旬（2015）,「解説」,丸山眞男著,古矢旬編『超国家主義の論理と心理 他8篇』,岩波文庫,531-80頁。  
松下圭一（1959）,『市民政治理論の形成』,岩波書店。  
———（1966）,「『市民』の人間型の現代的可能性」『思想』504号,1966年6月。  
丸山眞男（1992）,『忠誠と反逆—転形期日本の精神的位相』,筑摩書房。  
———（2014）,『政治の世界 他10篇』,岩波文庫。  
水島治郎〔編〕（2020）,『ポピュリズムという挑戦：岐路に立つ現代デモクラシー』,岩波書店。  
水村美苗（2008）,『日本語が亡びるとき：英語の世紀の中で』,筑摩書房。  
山崎正和（1987）,『柔らかい個人主義の誕生：消費社会の美学』,中公文庫。  
吉野源三郎（1982）,『君たちはどう生きるか』,岩波文庫。  
ウォーラーステイン, I（松岡利道訳）（1997）,『アフター・リベラリズム：近代世界システムを支えたイデオロギーの終焉』,藤原書店。  
ダワー, ジョン・W.（梅森直之訳）（1995）,「日本を測る（下）——英語圏における日本研究の歴史叙述——」,『思想』856号,67-89頁。  
———（三浦陽一, 高杉忠明訳）（2004）,『敗北を抱きしめて：第二次大戦後の日



松本礼二 著『知識人の時代と丸山眞男：比較20世紀思想史の試み』（岩波書店，2019年5月23日）

本人』（増補版）上，岩波書店。

ドーア，ロナルド（松居弘道訳）（1978），『学歴社会——新しい文明病』，岩波書店。  
——（加藤幹雄訳）（1991），『21世紀は個人主義の時代か：西欧の系譜と日本』，サイマル出版会。

ドゥブレ，レジス／ジャン・ジグラー（原章二訳）（1996），「知識人はなんの役に立つか？——屈服しないこと4」『みすず』422号，20-7頁。

パットナム，ロバート・D（柴内康文訳）（2006），『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』，柏書房。

ペラー，ロバート R.N.〔ほか〕（島菌進，中村圭志共訳）（1991），『心の習慣：アメリカ個人主義のゆくえ』，みすず書房。

ホッファー，エリック・（柄谷行人・柄谷満佐子訳）（1985），『現代という時代の気質』，晶文社。